

# 保健室DXの現状調査(2)

## ～学校で収集する健康情報をデジタル化するメリットとデメリット～

杉坂くるみ<sup>1)</sup>・高谷里依子<sup>2)</sup>・土屋綾子<sup>3,4,5)</sup>・森重比奈<sup>6,7)</sup>・野村 純<sup>2)\*</sup>

<sup>1)</sup>千葉県立千葉盲学校

<sup>2)</sup>千葉大学・教育学部

<sup>3)</sup>城西国際大学・看護学部

<sup>4)</sup>千葉大学・子どものこころの発達教育研究センター

<sup>5)</sup>大阪大学大学院 大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学 連合小児発達学研究科・博士課程

<sup>6)</sup>千葉大学・国際未来教育基幹

<sup>7)</sup>東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科・博士課程

## Advantages and Disadvantages of Digitizing Health Information Collected at Schools

SUGISAKA Kurumi<sup>1)</sup>, TAKATANI Rieko<sup>2)</sup>, TSUCHIYA Ayako<sup>3,4,5)</sup>, MORISHIGE Hina<sup>6,7)</sup> and NOMURA Jun<sup>2)\*</sup>

<sup>1)</sup>Chiba Blind School

<sup>2)</sup>Faculty of Education, Chiba University, Japan

<sup>3)</sup>Faculty of Nursing, Josai International University

<sup>4)</sup>Research Center for Child Mental Development, Chiba University, Japan

<sup>5)</sup>United Graduate School of Child Development, Osaka University, Kanazawa University, Hamamatsu University School of Medicine, Chiba University, and University of Fukui

<sup>6)</sup>Institute for Excellence in Educational Innovation, CHIBA University

<sup>7)</sup>Doctoral Course the United Graduate School of Education Tokyo Gakugei University

学校において教育DXが進められている。この中において保健室のDXに関してはGIGAスクールの整備とは異なっている。このため保健室で収集する情報管理のデジタル化に対し、現時点で養護教諭が感じているメリットとデメリットについて調査した。

健康・保健情報のデジタル化に伴うメリットについての養護教諭の意見としては、「業務の軽減」と「情報共有とその活用」がもっとも多かった。逆にデメリットとしては、VDT業務の増加、システムそのものの問題が挙げられている。システムに関しては将来的な学校保健のありかたを俯瞰的に考えた総合的な開発を、実際の使用者である養護教諭、担任、管理職さらには保護者の視点も交え、統一行的に行っていく必要があると考えられた。

キーワード：養護教諭 (Yogo (School Health) teacher), 教育DX (Digital Transformation of Education), 健康情報 (Health Information), デジタル管理システム (Digital Management Systems)

### I. 研究の背景と目的

#### 1. 研究の背景

教育現場に置いて教育DXが進められている。一方、学校で養護教諭が扱う健康情報の種類及び量は膨大である。こうした養護教諭の業務において、デジタル化を進めることは、非常に重要な課題である。現時点での保健・健康情報のデジタル化の現状として、令和5年3月の時点での学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果では、86.8%の学校が統合型校務支援システムを導入済みであると回答している<sup>1)</sup>。

先行研究ではこのデジタル化により養護教諭の業務の負担軽減になったとする調査報告がある<sup>1,2)</sup>。一方で、システムの多様性とその間での互換性の問題を指摘する意

見や養護教諭がかかわらない形で作られた情報管理システムに関して使いにくさを訴える声もある<sup>3)</sup>。

#### 2. 研究の目的

前報で健康情報のデジタル管理システムは同一県内にもかかわらず多くのシステムが存在し、なかには学校独自で開発されたものも一定数含まれていることを示した。

また、健康情報ごとにデジタル化の度合いは異なり、統一的に進められていないことが分かった。このため多数のシステムが存在する現状においてデジタルでの健康情報管理システムに対する養護教諭の使用感を明らかにすることが本研究の目的である。

\*連絡先著者：野村 純 jun@faculty.chiba-u.jp

## II. 研究方法

### 1. 調査対象

A県内の公立・国立学校の養護教諭1,309人に対し、調査を実施した。

### 2. 調査方法

Googleフォームによるアンケートを実施した。アンケートの依頼書を各学校に郵送して回答を求めた。この結果、621名から回答を得た。このうちデジタル化が済んでいると回答のあった養護教諭を抽出し分析した。

### 3. 調査内容

アンケート内容は以下のとおりである。

- (1) 勤務校の属性 勤務校の校種または小中学校地区
- (2) 健康診断票のデジタル化について
  - ① 健康診断票のデジタル化は執務の軽減に役立っているか
  - ② 健康診断票のデジタル化で良い点
  - ③ 健康診断票のデジタル化で困っている点
- (3) 欠席報告・把握のデジタル化について
  - ① 欠席報告・把握のデジタル化が執務の軽減に役立っているか
  - ② 欠席報告・連絡のデジタル化で良い点
  - ③ 欠席報告・連絡のデジタル化で困っている点
- (4) 健康観察のデジタル化について
  - ① 健康観察のデジタル化が執務の軽減に役立っているか
  - ② 健康診断のデジタル化で良い点
  - ③ 健康診断のデジタル化で困っている点

## III. 結果と考察

### 1. 回答者の属性

回答者621人のうち小中学校勤務が84.6%、高校勤務が11.1%、特別支援学校勤務が4.3%であった。このうち「健康・保健情報管理のデジタル化が行われている」と回答した養護教諭を抽出しメリットとデメリットを調査し、分析した。

### 2. 健康診断票のデジタル化は執務の軽減に役立っているのか (図1)

「健康診断票がデジタル管理されている」と回答のあった488名に対し調査した。健康診断票のデジタル化は執務の軽減に役立っているのかという問いに対して、「役立っている」448名(91.8%)、「役立っていない」40名(8.2%)であった。このため大多数が役に立つと考えていることが示された。

### 3. 健康診断票のデジタル化のメリット (表1)

健康診断票のデジタル化の良い点に関する回答としては「時間の短縮」、「管理のしやすさ」、「情報共有・活用に役立つ」という意見があった。

デジタル化移行の良い点としては、やはり業務の改善が挙げられていた。「時間の短縮」の観点では、記入に

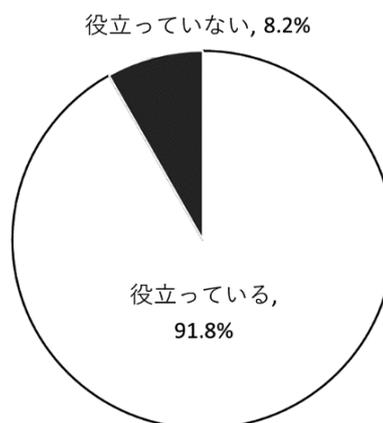


図1 健康診断票のデジタル化は執務の軽減に役立っているか (n=488)

表1 健康診断票のデジタル化のメリット

時間の短縮	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 手書きに比べ打ち込みの方が時間を短縮することができる。</li> <li>・ 初期値を設定することができるため、異常のない人は入力を省くことができる。</li> <li>・ 入力内容が同じ場合は一括入力を行うことができる。</li> <li>・ 年度内であれば訂正が安易にでき、訂正印も不要である。</li> <li>・ 清書する手間を省くことができる。</li> <li>・ 記入は養護教諭が担うため、担任に記入方法の伝達や、記入ミスの訂正、提出期限を過ぎた職員への催促などを省くことができる。</li> <li>・ 紙としての出力は卒業時または転出時のみであるため、印刷する手間を省くことができる。</li> </ul>
管理	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 紙媒体では耐火書庫管理を行っていたが、管理するスペースが必要なくなる</li> <li>・ 保管や紙面送付時の個人情報漏洩のリスクを回避することができる。</li> </ul>
情報共有・活用	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 手書きの時は記入者によって記述が難な場合があったが、質が均一になり誰が見ても読みやすくなる。</li> <li>・ 全職員が結果をすぐに調べることができる。</li> <li>・ 健康診断の結果を入力すると治療勧告まで作成することができる。</li> <li>・ 身長体重測定の結果を入力すると、成長曲線や肥満度をすぐに出すことができる。</li> <li>・ 県の保健室統計等に反映される。</li> <li>・ 視力検査の結果を担任へ共有し、席替えに活用してもらうことができる。</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 校印が省略され、学校医の印を購入しなくてよくなる。</li> </ul>

関して一括入力や記入の訂正のしやすさなど、デジタル入力ならではの点が挙げられていた。また、清書が必要なくなるといった2度手間の削減、養護教諭自身が入力を行うことにより、担任への説明や作業内容を十分に理解してもらうために費やす時間などの手間と時間の削減が挙げられている。

「管理のしやすさ」の観点からは保管場所の確保や保管場所からの情報漏洩のリスク軽減のための取り組みの手間がなくなることが挙げられていた。

「情報共有・活用に役立つ」の観点からは、全職員による児童生徒の健康情報の共有が容易になり、学級経営に反映しやすくなることという意見があった。さらに成長曲線や肥満度がすぐに分析でき、健康状態の判断が容易になるという意見もあった。

これらのことは大川らの調査でもICT導入のメリットとしてあげられており、養護教諭の54.4%が「業務負担が軽減した」、23.7%が「記入ミス削減につながった」、21.1%が「情報共有の迅速化につながった」と回答している<sup>2)</sup>。

さらに大川らの報告では、4.4%の養護教諭が「疾病の早期発見に有効」と回答している<sup>2)</sup>。これは本調査における「成長曲線や肥満度をすぐに出せる」と関連しているのではないかと推測している。単にデータがあるだけでなく、デジタル化により迅速に分析し、過去のデータと比較することが可能になっていけば、健康データが児童生徒の健康維持・増進により効果的に活用できることが期待される。

#### 4. 健康診断票のデジタル化のデメリット (表2)。

まず、「役に立たない」と回答した者が8.2%存在しており、なぜそのように回答したかについて丁寧に分析する必要がある。

デジタル化により困っている点としては、「システムの操作性や機能の問題」、「入力作業の負担」、「デジタルと紙媒体の共存」、「システムの互換性」が挙げられていた。「システムの操作性や機能」に関しては、情報入力自由度の制限が挙げられていた。項目が選択性の場合には選択肢にないことが入力できない、細かな情報が入力できない、年度をまたいだデータの取り扱いが煩雑といった指摘がある。

このような事態になっている根本的な問題点として、「作成者が学校保健の実態を知らないと感じるため、養護教諭の思想がシステムに反映されておらず使いにくい」という、そもそも学校保健の実態に即しておらず設計に根本的な問題があるといった内容である。これに関しては本問らの報告でも養護教諭の意見として「システム作成者が養護教諭の要望を聞かずに作成しており、使いづらい」という意見があることを示している<sup>3)</sup>。また、

表2 健康診断票のデジタル化のデメリット

操作性や機能に問題がある	<ul style="list-style-type: none"> <li>決まった書式や選択肢でしか入力できないため、珍しい病名や学校医からの細かい指示は手書きで書かなければならない。</li> <li>経過観察や治療経過を細かく入力することができない。</li> <li>秋の歯科検診等は入力できないため、紙面で残しているデータの引継ぎはできない。</li> <li>有所見者に校医名をひとりひとり入力しなければならない。</li> <li>前年度以前の訂正は教育委員会のPCで行わなければならない。</li> <li>前年以前のデータは養護教諭のPCでは検索できないため、管理職にお願いしなければならない。経年変化を追うのが大変である。</li> <li>入力と反映結果が異なるプログラミングがされており、操作が複雑である。</li> <li>不具合が見つかったも修正する予算がないため、中々改善されない。</li> <li>作成者が学校保健の実態をあまり知らないと感じるため、養護教諭の思想がシステムに反映されておらず使いにくい。</li> <li>マニュアルが説明不足で使い方がわからない。</li> <li>研修がないため使い方がわからない。</li> </ul>
入力作業の負担	<ul style="list-style-type: none"> <li>紙面の場合は担任に記入をお願いしていたが、デジタル化では養護教諭がすべて入力するため、仕事量は増えた。担任が児童生徒の健康状態を知る機会も減少した。</li> <li>一学期中に入力をすべて終えないと保護者へ結果を配布できないため、一学期の多忙に拍車がかかった。</li> <li>来室者が来るたびにPCを閉じなければならない。</li> <li>小規模校では手書きの方が速い。</li> <li>入力は養護教諭のみのため、ダブルチェックを行うことが難しい。</li> <li>PC作業が苦手なため、作業効率が悪くなる。</li> <li>視力の低下や肩こり、腰痛などの健康被害が生じる。</li> </ul>
デジタル+紙媒体の共存	<ul style="list-style-type: none"> <li>データ消失を防ぐため、毎年紙面に印刷し保管している。前年のものはシュレッダーで破棄をするため、印刷も破棄も手間である。</li> <li>転入生など一部を紙保管するのが大変である。</li> <li>歯科検診では紙面に記入した後、PCに入力するため二度手間である。</li> </ul>
システムの互換性	<ul style="list-style-type: none"> <li>市外からの転出入時にデータでの引継ぎができない。</li> <li>転校回数が増えたと紙面の枚数も増える。</li> <li>数年に一度システム業者が代わるため、負担が大きい。データを引き継ぐことができない。</li> <li>市外へ移動した際に、新しいシステムの操作を覚えるのが大変。</li> <li>自作のフォーマットであるため、引継ぎが難しい。</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>常にデータ消失の不安がある。</li> <li>わざわざPCを立ち上げなければデータをみることができない。</li> <li>両面印刷ができないため、時間がかかる。紙が勿体ない。</li> </ul>

「マニュアルが説明不足で使い方がわからない」や「研修がないため使い方がわからない」などシステムの使用方法の説明や研修がなく養護教諭が試行錯誤しなければならない実態も読み取れた。

「入力作業の負担」に関しては、メリットのところでは担任への説明や理解のための伝達が軽減されるという意見があった一方で、養護教諭自身が入力しなければならないため、健康診断のある1学期におけるVDT作業時間が膨大になり、「仕事量は増えた」という意見があった。そして「視力の低下や肩こり、腰痛などの健康障害が生じる」というVDT作業の長時間化による体調不良にも言及されていた<sup>4)</sup>。また、入力操作時の個人情報保護のために「来室者が来るたびにPCを閉じなければならない」という問題も挙げられている。これに関わるものとして「その他」のところでは「わざわざPCを立ち上げなければデータを見ることができない」という煩雑さも指摘されていた。

次に、移行期の課題であると考えられる「デジタル+紙媒体の共存」が挙げられていた。現時点ではデジタルデータと紙媒体の情報が共存している状況のため、結局、健康情報を紙媒体でも準備する必要があり、2度手間になること、管理が煩雑になることが指摘されている。

他に、「システムの互換性」の問題として、各地区、場合によっては学校間ごとでシステムが異なることにより、児童生徒が転校した場合に健康情報が使えないこと、養護教諭が異動した場合、システムの使い方をはじめから学び直さなければならないとの指摘がある。さらに学校によってはシステムの作成業者が定期的に変わるという報告があり、変更されると情報、経験が引き継げなくなるという、根本的な問題が発生することは指摘されている。

これらの指摘には学校における個人情報の扱い方の考え方、規則に起因するものもある。それ以上に問題があると考えられるのは、現場でデジタル化に関しての将来的、俯瞰的な展望・視点を持たずに場当たりに進められている実態があるのではないかと推測される点である。この点に関してはDXにかかわる研究者、開発者、使用者での国家的な視点での協働的な取り組みが必要になると考えられる。

#### 5. 欠席報告・把握のデジタル化 (図2)

欠席報告・把握の情報がデジタル化されていると回答したものは463名であった。このうちデジタル化が執務の軽減に役立っていると回答したものが435名(94.0%)、役立っていない28名(6.0%)であった。

#### 6. 欠席報告・把握のデジタル化のメリット (表3)

欠席報告・把握のデジタル化のメリットとして「把握・確認が便利」、「連絡の負担が軽減」、「情報共有・活用」のしやすさ、「時間短縮」が挙げられた。

「把握・確認が便利」では書式が決まっているため聞き漏らしや、表現の曖昧さなどが排除できること、養護教諭まですぐに情報が入ってくることが示された。

「情報共有・活用」としては学校のみならず市や県内の状況も把握でき、これが感染症の状況把握に役立ち、

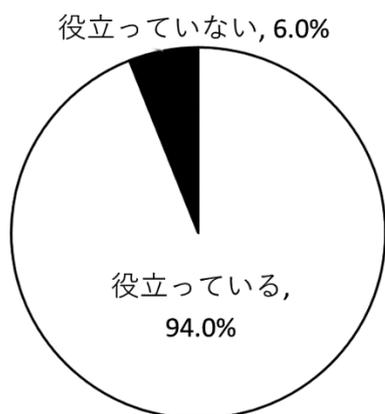


図2 欠席報告・把握のデジタル化が執務の軽減に役立っているのか (n=463)

表3 欠席報告・把握のデジタル化のメリット

把握・確認が便利	<ul style="list-style-type: none"> <li>欠席理由が統一されているためわかりやすい。</li> <li>保護者が入力した情報をそのまま確認できるため、担任だけではなく養護教諭も詳しい欠席理由を把握することができる。</li> <li>健康観察票が集まる前に欠席状況を確認することができる。</li> <li>体温などの聞き忘れがなくなる。</li> </ul>
連絡の負担の軽減	<ul style="list-style-type: none"> <li>保護者が連絡しやすい。</li> <li>仕事などで朝電話連絡できない保護者でも連絡できる。</li> <li>前日や土日の入力も可能である。</li> <li>長欠の保護者も連絡しやすい。</li> </ul>
情報共有・活用	<ul style="list-style-type: none"> <li>全職員で情報共有ができるため、伝達ミスや確認する手間を減らすことができる。</li> <li>担任に話を聞ききっかけになる。</li> <li>以前の欠席理由などを振り返ることができる。長欠傾向を把握しやすい。</li> <li>市・県全体の感染症状況などを把握することができる。他の学校の欠席者の推移が分かる。</li> <li>学級閉鎖の対応が素早くできる。</li> <li>出張や休暇の際もある程度確認できる。</li> <li>土日に管理職と学級閉鎖などの予測を立てることができる。</li> </ul>
時間の短縮	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校側の電話対応の負担が減った。回線が確保できる。</li> <li>内線の利用や教室への伝達をしなくてもよくなった。</li> <li>月末の出席停止報告書が自動で作成される。</li> <li>学級閉鎖時の市教委への報告が簡潔される。</li> </ul>

学級閉鎖や休校等の判断に役立つことに言及していた。また、児童生徒の長期欠席傾向などについても早く気が付き、担任とのコミュニケーションのきっかけとしても有効であるとしていた。

「時間の短縮」としては学校内外への電話連絡で時間を取られなくなったこと、報告の簡素化について言及していた。

### 7. 欠席報告・把握のデジタル化のデメリット (表4)

欠席報告・把握のデジタル化のデメリットとしては「デジタルに完全移行ができない」こと、「情報の共有・活用の不備」が挙げられた。

「デジタルに完全移行ができない」ことでは、連絡の不備に加え家庭の事情として、家庭のデジタル化の遅れや外国籍児童生徒への対応が挙げられていた。

「情報の共有・活用の不備」では、担任とのコミュニケーションの機会の増加が挙げられていた一方で、担任とのコミュニケーション不足がデメリットとして挙げられて

表4 欠席報告・把握のデジタル化のデメリット

デジタルに完全移行ができない	<ul style="list-style-type: none"> <li>欠席理由の詳細が未記入の場合は電話等での再確認が必要。</li> <li>変更時は確認漏れを防ぐために電話連絡をしてもらっている。</li> <li>報告時間が過ぎてしまうと電話連絡をしなければならない。</li> <li>端末やアプリ等を利用しない家庭もあり、一律に整備することが難しい</li> <li>電話連絡と混在し、情報の管理が難しい。電話連絡の情報共有を忘れてしまうことがある。</li> <li>外国籍の保護者は使い方がわからない。</li> </ul>
情報の共有・活用の不備	<ul style="list-style-type: none"> <li>保護者と直接話ができないため、担任とのコミュニケーション不足になる</li> <li>出席簿・健康観察簿と連動していない。</li> <li>保護者が返信を確認しているか確認ができない。</li> <li>補教の教員は見ることができない。</li> <li>複数の症状があってもひとつしか入力できない。</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒が保護者になりすまして連絡することがある。保護者は子どもが休んでいることを知らない。</li> <li>保護者からの一方的な要望 (〇時に電話してください等) が書かれている。</li> <li>保護者から担任に対する誹謗中傷のような書き込みをされることがある。</li> <li>欠席することへの抵抗感が減った。</li> <li>長欠生徒の状況確認が難しい。</li> <li>担任や電話対応の先生の執務の軽減には役立っているが、養護教諭はわからない。</li> </ul>

いた。これには養護教諭個々のパーソナリティも関係していることが推測できる。また、システムの問題があげられており、これは学校の実情を理解しない開発が行われていることの表れであろうと推測される。

「その他」では、なりすまみや、保護者からの一方的な要望、誹謗中傷などSNSが抱える問題点がこの情報デジタル化にも課題として表れることが示されており、今後取り組んでいかなければならないものである。また、デジタル化により欠席に対するハードルが下がることが指摘されている。これもコロナ禍後に欠席者や不登校者が増加している問題と重なり、今後の大きな課題となると考えられる。

### 8. 健康観察のデジタル化 (図3)

健康観察のデジタル化がされているという回答は非常

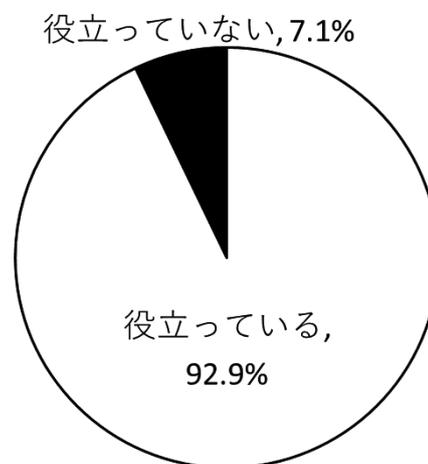


図3 健康観察のデジタル化が執務の軽減に役立っているのか (n=42)

に少なく42名であり、回答者の6.8%に過ぎなかった。このうちデジタル化が執務の軽減に役立っていると回答したものが39名(92.9%)、逆に役立っていないと回答したものが3名(7.1%)であった。したがってデジタル化されている学校に勤務する養護教諭のほとんどがデジタル化に肯定的な回答であった。

### 9. 健康観察のデジタル化のメリット (表5)

健康観察のデジタル化で良い点としては養護教諭の「事務作業の軽減」、「情報共有・活用」が挙げられていた。

「事務作業の軽減」としてはデジタル化により集計が楽になることが挙げられていた。また、担任の負担が減るといった指摘もあった。

「情報共有・活用」では他の健康情報と同様に全職員での共有が可能になることが挙げられていた。また、現時点では健康観察は教室内で皆がいる中でおこなわれることが多いため、プライバシーの保護の観点から望ましくない状況にあるが、デジタル化すると個別に答えられることより、プライバシー保護の問題を解決することができるという意見があった。この点に関しては珍田らも同様な指摘を行っている<sup>5)</sup>。

### 10. 健康観察のデジタル化のデメリット (表6)

健康観察のデジタル化で困っている点としては「完全にデジタル化できない」こと「システムの操作性や機能に問題がある」ことが挙げられていた。

「完全にデジタル化できない」理由としては紙媒体に慣れている教師の存在や時間的余裕がないことが挙げられていた。この点に関しては技術革新によるインターフェースの発展を待つことになるのではないかとと思われる。

「システムの操作性や機能に問題がある」としてはプ

ロフェッショナルによらない学校独自での開発などの問題が挙げられていた。この件は現時点では健康観察が組織的にデジタル化されておらず、使用している場合は独自のシステムを使っている例が多いのではないかと考えられる。今後、大手のシステム開発業者が参入することでシステム自体の安定性が改善する可能性がある。

## IV まとめ

健康・保健情報のデジタル化に伴うメリットについての養護教諭の意見としては、「業務の軽減」と「情報共有とその活用」がもっとも大きなものと考えられる。逆にデメリットとしては、「VDT業務の増加」、「システムそのものの問題」が挙げられている。システムに関しては将来的な学校保健のありかたを俯瞰的に考えた総合的な開発を、実際の使用者である養護教諭、担任、管理職さらには保護者の視点も交え、統一的に行っていく必要があると考えられた。また、これらのデータをビッグデータとして教育DXに活かすのであれば、学校における個人情報扱い方も含めたプロジェクトとして一体的に実施する必要があると考えられる。

## V 謝辞

この研究は科学研究費補助金挑戦的研究(萌芽)23K17584および科学研究費補助金基盤研究(B)23K25694の成果に基づくものである。またこの研究の実施に当たって協力いただいた千葉県養護教諭会、またアンケート調査に協力いただいた先生方に深く感謝いたします。

## VI 参考文献

- 1) 令和4年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果(概要) [https://www.mext.go.jp/content/20231031-mxt\\_jogai01-000030617\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20231031-mxt_jogai01-000030617_1.pdf) (2024年10月3日閲覧)。
- 2) 大川尚子, 矢本良江, 学校保健における養護教諭のICT活用, 京都女子大学発達教育学部紀要20, 59-66, 2024.
- 3) 本間史祥, 珍田洋子, 小林央美, ICTを活用した健康観察の成果と課題~新型コロナウイルスの感染予防への対応を見据えて~, 弘前大学教育学部研究紀要27, 63-72, 2023.
- 4) 岩崎明夫, VDT作業とその対策, 産業保健21, 89, 12-15, 2017.
- 5) 珍田洋子, 小林央美, 相馬優樹, 本間史祥, ICTを活用した健康観察の成果と課題 第2報~中学生を対象とした意識調査の結果から~, 弘前大学教育学部紀要, 131, 189-197, 2024.

表5 健康観察のデジタル化のメリット

事務作業の軽減	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 養護教諭が集計しなくてよくなる。集計が楽になる。</li> <li>・ 担任の負担が減る。</li> </ul>
情報共有・活用	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 全ての職員で情報共有をすることができる。</li> <li>・ 児童生徒がみんなの前で発言をしなくて良いので、プライバシーが守られる。</li> <li>・ 体調に変化があったときに訂正がしやすい。</li> <li>・ ひとりひとりの詳細な体調を把握することができる。</li> <li>・ 自動で集計され、保健日誌にも反映される。</li> <li>・ 出席簿に反映することができる。</li> </ul>

表6 健康観察のデジタル化のデメリット

完全にデジタルに移行できない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 紙媒体のほうが使いやすい担任もいるため、紙媒体とデジタルを併用している。</li> <li>・ 担任にとって朝の忙しい時間に細かい入力作業は手間である</li> <li>・ 担任が毎日入力してくれない。各担任への周知が難しい。</li> </ul>
操作性や機能に問題がある	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ PCからシステムを開き入力できない時がある。</li> <li>・ 校長が作ったものであるため、少しでも数式がおかしくなると直せない。</li> <li>・ 選択肢にあてはまらない症状は全てその他になってしまうので、詳細を記録することができない。</li> </ul>